



ねりまの文化財

区内遺跡の出土品展

11/1 ~ 11/5

開催のお知らせ

11月1日から11月7日は、文化庁が主催する「文化財保護強調週間」であり、全国で文化財愛護の催しがおこなわれます。

練馬区では、「区内遺跡の出土品展」と題し、過去10年間の遺跡発掘調査で出土した遺物を練馬区役所1階に展示します。

昔の人々は、どんな土器をいどのような生活をしていたのでしょうか。縄文土器を中心として、弥生土器・土師器・須恵器など、多くの土器に触れ、親しみを持ち関心を深めていただきたいと思います。

▽開催期間 11月1日(月)～11月5日(金)

8時30分～17時15分

(ただし、11月3日(水)は文化の日のためお休みです)

練馬区教育委員会
社会教育課
(文化財係)

☎ 3993-1111 内線 2766
〒176 練馬区豊玉北6-12-1

秋の文化財講座

ご案内

江戸市民の大切な飲料水であった上水について学び、羽村の堰などを訪ねます。

ぜひご参加ください。

○とき・ところ

● 11月25日(木) <講義>

14時～16時

総合教育センター

● 11月26日(金) <見学>

8時30分～16時30分

羽村の堰

羽村市郷土博物館

○申込 往復はがきにて、多数の場合には抽選

場場合は抽選

◎詳しくは、11月1日号区報をご覧ください。

▽開催場所 練馬区役所1階

多目的コナー

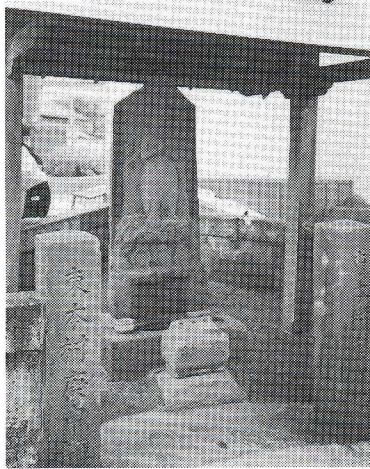
(中央館・西館連絡通路)

下練馬道は生活の道

文化財保護推進員 伊藤 経一

道の呼称については、従来から目的地の名を冠したものが多く。例えば、ふじ大道、東高野山道というようである。今回取り上げた下練馬道は、村内を縦断しているため、こう呼ばれるようになったと考えられる。ところでこの道の起点は、練馬区教育委員会の説明板によると、川越街道の上板橋一丁目付近(旧上板橋村字七軒家)から分かれているという。現在の東武東上線(板橋駅南口銀座通りの辺)である。

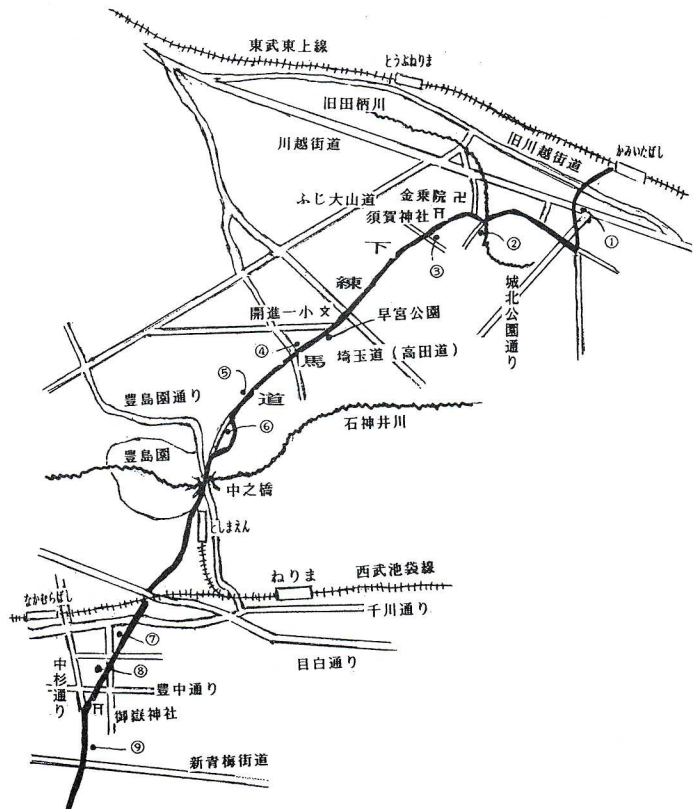
この道は新川越街道(五本けやき①)を渡って小茂根方面に向かい、城北公園通りを斜



▷ ②平和台一―一四 庚申塔と門柱

めに突っ切り、桜川三―一四先で右折、もう一度公園通りを渡る。つまりこの道が下練馬村へ通じる旧道である。道は右へ曲がるようにすすみ、桜川三―七と八番地の間の道を左折する。角にマンションがあり、脇に屋敷神の小祠のある通りである。

田柄川に向かう道は下りきみで、やがて渡戸橋跡の貞享二年(一六八五)の庚申塔の前に出る②。ここから右折して少し行くと、下練馬下宿から棚橋、金乗院を経て来た「くる



み商店街」の道が右から合流する。この辺の字名を御殿という。徳川五代將軍綱吉がまだ右馬頭の頃、脚氣を患い、転地療養したのがこの地であるという。

金乗院墓地を右に見てすすむと五叉路に出る。まっすぐ行けば右に須賀神社がある。神社の鳥居には、大正十一年(一九二二)五月と刻まれてあった。神社をすぎ、次の十字路平和台一―二八の川島氏宅の塀の間に、天保五年(一八三四)の道標を兼ねた文字庚申塔

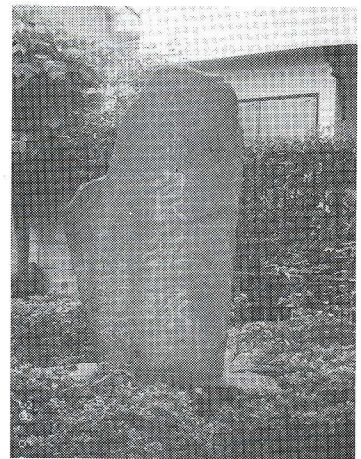
が建っている③。この辺りが下練馬本村の位置である。

ここから先は住宅地で単調になる。埼玉道(高田道)を越えるとすぐ、大山道へ通じる道が分かれている。左の早宮公園には、下練馬道の石標と区教委の説明板がある。こちらから左右に畠があったり、屋敷森がちらちら見えたが、すぐに練馬工業高校入口の十字路に出る。角に大正五年(一九一六)講中の安全を願った石祠がある④。

本寿院入口の信号の手前、早宮四一・一九の角地にお堂があり、中に享保二十年(一七三五)の庚申塔が祀られている⑤。さらに先のスーパ―よしやの手前、左の細い道にコンクリート製の祠に、宝永五年(一七〇八)の庚申塔と享保三年(一七一八)の地蔵が祀られている⑥。この道が下練馬道の旧道である。

住宅街であるが旧道らしい細い道は約二五〇メートル程つづき、早宮三一五七先で新道に戻るとすぐ中之橋で豊島園通りと合流する。橋を渡り豊島園の堀沿いの道に入り、同園正門前を横切り、向山庭園への道を見送ると、向山の住宅地である。細く曲がりくねっている道は、古い道であることを思わせる。住宅の少なかった頃は、白山神社の大げやきもすぐ近くに見えたことであろう。しかし、この道は目白通りの陸橋でパッサリと断ち切られ

◁ ⑧良弁塚碑



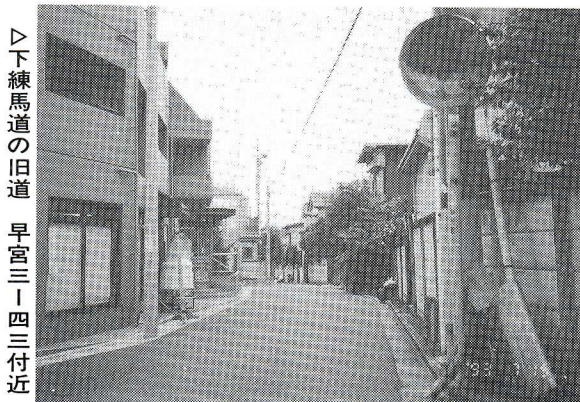
ている。向かいの道へ行くためには、目白通りをしばらく下り、信号を渡らねばならない。いつの日か元通りになることを願っている。

中村北二丁目のバス停のところで千川通りを渡り、テラス中村橋マンションの脇の細い道に入る。右に一坪農園、左に東海病院がある。その先の駐車場角に、寛政十二年(一八〇〇)の庚申塔があったが、平成五年四月に南蔵院墓地に移された⑦。次の角に下練馬道の石標が建っているが、ここは中村地区、ちよつと異質な感じを受けた。

源義家が永保三年(一〇八三)奥州へ出陣する際、この道を通り白山神社に戦勝祈願をし、げやきの苗木を奉納したという。したがってこの道は、かつての鎌倉古道のわき道といえるのではないだろうか。

道は中村公園の十字路でちよつと分かりに

くくなるが、小祠の前に建つ、歴史と文化の散歩道の案内板にしたがって、向かいの道に入ればすぐに良弁塚を右に見ることができ⑧。さらに豊中通りを渡ると左手の住宅の屋根越しに大木が見える。ここが御嶽神社で、正・五・九の十八日に探湯式などが行われる。そして中杉通りと一緒に通った道は、左側の『願かけ地蔵』のところで中野区に入り、鷺宮福蔵院方面へ通じているのである⑨。この下練馬道は、村の中心から近郊の村々へ通じる便利な生活の道であったものと思われる。



▷ 下練馬道の旧道 早宮三一四三付近

明治時代の石神井、大泉地域

—近代産業—

文化財保護推進員 瓜生 清

平成五年、文化庁は「近代化遺産」として「碓氷峠鉄道施設」など一〇件を、重要文化財に指定した。いうまでもなく明治維新後、日本の近代化をめざした先人の努力の跡をふりかえり、特に産業・交通・土木・教育資料などの「近代化産業遺産」の保存と認識を目的としたものであろう。

練馬区内にもこの目的に該当する先進的な事蹟が多く残されているが、今回は特に西部石泉地域の、近代化の夜明けを紹介したい。

(1) 産業—府第一の生産と製糸創業—

明治七年、東京府の生産状況を詳しく記録した『府志料』がある。五年時の調査で、何と石神井地域の油絞・清酒・醬油の産額が東京府(約二三区の範囲)の首位を占めていたのである。いづれも江戸末期から発展した産業で、これと並行して導入した蚕業が、維新後の桑茶政策に乗って爆発的に繭の生産量が増え、遂に東京府で最初の民営製糸工場が石神井に開設された。(稟申録など所収)

明治十二年一月、五馬力の蒸気製糸器械取設願を出し三月許可試運転、六月一〇日開業し、十二月末まで横浜の同仲社を通じ、米国

直輸して約一万六千余円の収入を挙げた。

場所は三宝寺と道場寺の間で、約40m×60mの範囲の「興就社」という工場である。

(資本金一万円—日本橋を中心とする市内民営会社で当時資本金一万円以上は三〇社にすぎない。工女50人採り。釜数48個。九月政府第一回共進会で養蚕功績者に推薦された。)

これに刺激されたか翌十三年七月、下石神井の千川べりに資本金三万円の『同潤社』が開業(工女120人採り。千川用水を利用。)

両社とも二十年ごろより官営工場の払下げや大資本の進出などで、以後営業不振閉鎖となった。しかし三一年上州より著名な養蚕技師田島鉄平氏を招聘して指導を受け、以前にも増して繭生産量は増大し、昭和初期まで石泉地域は旧東京府の蚕都といわれた。

また明治二年三月、石神井城趾の主郭で、乳牛三頭による酪農が初めて行われた。

(2) 通信—若い先覚者の活躍—

明治五年川越街道下練馬宿にいち早く郵便局が開設された。石神井地域は少し遅れて九年四月、駅通局の許可を得て下石神井に五等郵便局が開設。局長は当時一九歳で三年後村会議長、翌年製糸工場同潤社長となった。

(3) 土木—田柄用水と水車産業—

維新後、四年七月の廃藩置県まで練馬区周辺は品川県に属していた。四年一月田無村よ

り下練馬村までの一〇か村の戸長(村長)連名で、『新堀歎願書』—田柄用水開さくが出された。玉川上水の分水、田無用水をさらに東へ延伸して田柄川と連結し、水田開発などを目的とした。村毎で五月ごろ完成、翌五年『水行報告』が関・上、下石神井・下土支田四か村連盟でお礼を兼ねて出されている。以後曲折を経て通水し、明治十二年以後六か所の水車も稼働して、製糸や伸銅にも利用された。

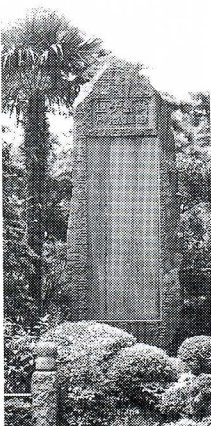
(4) 教育—府でも早い時期の開学—

明治五年八月学制発布後、大泉地区では学院を仮用して早くも翌六年三月、学校事務を開始。七年六月ごろ『橋戸学校』開校。

石神井地区では七年五月、禅定院を仮用して『豊島学校』開校、七月には三分校がそれぞれ誕生した。九月には東大泉の妙延寺に、府の学区最初の市立一番校『明倫校』開設。

(5) 行政—府でも初期の村会規則書—

明治十一年七月政府は『三新法』制定、地方自治の法人格が認められた。上石神井村と関村は連合村となり、十三年五月案の『村会議事規則』を直ちに作成し運用した。



△ 田島君 鉄平 之 碑